

新時代

第 6 号

昭和 4 2 年 3 月 1 日

目 次

巻頭言「魅力ある会になれ」	本 間 昭 雄	1
私と書斎（一つの随想）	高 島 善 哉	2
幕末における海外渡航者の盲・聾教育観 ..	加 藤 康 昭	6
点字教室に思う	田 口 洋 子	10
盲人牧師の草分け藤田匡	大 村 善 永	12
座談会・外から見た盲界	井 口 淳 爾 池 島 玲	21
盲人の大学進学に関する調査報告	池 島 玲 爾	31
会からの報告	高 橋 実	33
編 集 後 記	田 中 徹 二	35

発 行 所 日 本 盲 人 福 祉 研 究 会
(文 月 会)

編 集 編 集 委 員 会 (東 部 地 区)

事 務 所 大 阪 市 東 淀 川 区 東 三 国 町 2 の 2 0

巻頭言 魅力ある会になれ

本 間 昭 雄

(盲老人ホーム聖明)
(園々長本会監事)

私は常日頃、自分の無能をよく知り、知るが故に反省して、より良く日々を過したいと念願しております。何の取柄がなくても、何か個人個人の魅力と云うもの、よさというものがある筈であります。蒲郡の総会と、名古屋の総会に出席させて頂き、私なりに感じた事を述べてみたいと思います。

前述の如く、魅力と云う事、これは、個人、団体を問わず、まことに必要な事だと思います。盲人福祉研究会が、年々役員、会員のお骨折によつて発展し、次第にその予算規模も大きくなり、実行しなければならない事業も多くなってきました。

このような時に、果してこの会が、会員からみて、魅力ある会であるかどうか反省すべき段階に来ているのではないかと思います。一部会員の意志のまゝに運営されたり、利用されたり、あるいは時間がルーズになり、運営がマンネリズムに陥いつていないかなど……

このような事を書くとは叱られるかもしれないが、私は色々な団体や、種々な会合に出席して思う事は、特に時間がルーズで、計画性に欠けている事を痛感して何かやり切れない気がして帰路に着く事がしばしばあり、「時は金なり」と云いますが、全くその通りで、今日の文化の進んだ時代は、とくに貴重だと云いたいのであります。

魅力ある会になれと云う一つの足がかりに、時間を有効に、また正確に守ると云う事に、盲界のインテリジェンスのメンバーが占めるこの会が、範を示したらどうであろう。皆さんもご承知の通り、ロータリークラブと云うのがありますが全国に約二万五千人を越すメンバーの集りで、週一回所属するクラブの例会に出席するのですが、時間がすべて厳守されているのは、何時も感心させられるのです。初まるから終るまで、……

私はこのあり方は非常に素晴らしいと思います。大会社の、いわゆるトップ級

の方々の集りで、それぞれ忙がしい方々ですが、個人個人が時間を大切にし、また遅刻しない事を原則としています。それを当然と考えて居られる。吾々の会合にもぜひ、まねてみてはいかゞでしょうか。勿論研究会の総会ばかりでなく、皆さんの所属するすべての場所に実行して下下さい。それが、一つの魅力としてあらゆる面に良い影響を及ぼす事、必至と思います。思う事はやさしく、実行する事の難かしさを、私自身痛感しているのです。

私 と 書 斎 （一つの随想）

高 島 善 哉

（元一橋大学教授・現中央大学・関
東学院大学講師・社会科学専攻）

「先生の書斎はどこですか」... これは長年私の家に入出入りしているある女性の研究者が私に突然いい出した質問である。かの女は私のゼミナリス滕の一人であつて、もう五年以上もの間私の家へ出入りしているのである。私は目が不自由な関係から、セミナールは自宅で行なうことにきめている。毎週土曜日にはだいたい午前十時すぎから午後二時少し前まで、その間に食事の時間をはさみながら、十人ばかりの大学院の学生諸君を相手に研究討論を行なつたり、社会や人生のさまざまな問題について語り合つたりする。かの女はこのグループの紅一点なのである。

男の学生には、私の書斎がどこにあるかと、そんなことはたいした問題ではなかったかもしれない。多分そんな問題について気がつかないかもしれないと思うのだが、さすがにかの女は女性らしい敏感さで私の家の間取りやたたずまいを観察していたものらしい。私の家には大小合せて六つばかりの部屋数があるのに、どうも書斎というものが設けられていないらしい。かの女はそのことに気がついてきつと奇妙な感じに襲われたにちがいない。そこで突然「先生の書斎はどこですか」という不思議な質問を私に向かって提出せざるをえなくなったのであろう。

これに似た呼びかけをほかの学生から受けたこともある。「先生の書斎をみせて下さい」と、これは家にはあまりこないが学校で非常に親しくなつたある学生

の呼びかけである。内情を知らない学生たち、教壇や研究室の教師しか知らない学生たちにとって、教授の書齋というものがどんなに神秘「？」にみち、好奇心に溢れた殿堂であろうか。私自身若いころの自分をふり返ってみて、まったく同じことだと感ずる。

私はいまから三十年以上も前のことを思い出す。私の尊敬する指導教授O先生の書齋に通されたときのことを思い出す。書齋といっても応接間であり、それもほんのささやかでなんの飾りもない六畳の応接間である。北側にだけ窓があつて東の壁際には奥さんのピアノが一台デンと置かれてあり、西と入口を除いた南の壁には、床から天井までぎっしりと書物を抱えこんだ書棚が立っていた。その書棚のなんと簡素でみすぼらしくさえみえたことであろう。しかしそれよりも私の驚きは、書棚いっぱいにつまっていた書物そのものにあつた。明治の初年から大正の初期にいたるまでの日本の経済学に関する古典的な文献が、そこには整然と――まったく文字どおり整然と――きら星のように並べられているではないか。なんとという壮観、なんとというすばらしさであろうか。神秘の扉はいま自分の前に開かれた。私は先生の隠されていた一面が、そのとき惜しみなく私の前にさらけ出されたような気がしたのであつた。

だが、自分の書齋に帰る前に、もう少しO先生の書齋について述べておきたい。O先生のお宅には実は書齋というものがなかったのである。あるといえはあるし、ないといえないというのがほんとうであろう。先生の家へ出入りすることがだんだんと繁くなるのにつれて、このことがしだいにわかつてきた。書物は応接間よりはお座敷に充満している。ろう下にも立ち並んでいるし、奥の四畳の部屋の壁にもぎっしりつまっている。全山これ桜というありさまである。その書棚がいずれもそろって簡素でみすぼらしいといったらよいか、応接間で私が最初にみたものとそっくり同じである。柱も棚もすべて三本の白木の細い角材を組み合せたものにすぎない。なんの飾り気もない学問の道場といった感じ、それでいて気のおけない町の道場といった感じである。書齋で先生が勉強するのでなく、先生が勉強するところが書齋だといったら、やや真相に近いであろうか。私はいまは出入りすることのなくなった先生の書齋のことを思い出さないわけにはいかないのである。

「先生の書齋をみせて下さい」と学生からいわれたときに、私の胸にこみあげ

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

新時代 第六号

昭和四十二年三月一日発行 (非売品)

発行所 大阪市東淀川区東三国町二ノ二〇

振替口座 大阪二七五八八番

日本盲人福祉研究会

(旧称・文月会)

編集人 「新時代」編集委員会